

### 2026年も太陽電池出荷首位見通し、蓄電池2～3倍に拡大へ ジンコソーラー副会長 銭晶氏

ジンコソーラーは、2025年の太陽電池モジュールの出荷量はおよそ90GW規模で、世界首位となった。中国の太陽電池メーカー各社は、生産過剰の影響などで同年の業績が軒並み赤字に見舞われた。だがこうした中でも、同社は2026年も出荷量で世界首位をうかがう。厳しい競争環境、またイランなどでの情勢不安定化も発生する中で、世界における事業のリスクやそのうえでの展開をどう見据えているか、同社副会長の銭晶氏にお話を伺った。

-2025年の世界や日本での太陽電池モジュール出荷量の実績、また講評をお聞かせください

銭晶 2025年の当社の太陽電池モジュールの出荷量はおよそ90GW規模。太陽電池の生産過剰により、2025年は業界として最も困難な時期であった。2026年の出荷量については2025年と同等の規模になると見ているが、今年もジンコソーラーは世界をリードし、おそらく2026年も世界首位の出荷になると見ている。今年は防眩や軽量タイプなど、新たに6種類のモジュール製品もリリースする計画だ。

また日本での2025年の出荷量は、7年連続でシェア首位となるおよそ1.2GW規模。2位のメーカーはジンコソーラーの半分程度の出荷量にとどまるもようだ。そして2026年の日本での出荷量のターゲットは1.5GW規模を想定する。2025年はメガソーラー案件向けの出荷が多かったが、今後は住宅向け製品の提供にも注力していきたい。

-太陽電池のほか、近年販売に注力する蓄電システムの世界や日本における出荷実績は

銭晶 2025年の蓄電システムの出荷量はおよそ6GWhだった。この数値は、ユーティリティ案件や業務用といった産業用案件の製品の数値で、2024年から6倍に伸長した。2026年の出荷量は、2025年の2～3倍となる15～18GWhに伸長すると見ている。また日本への産業用蓄電システムの出荷量は2025年が200MWh程度だった。

2026年は日本も出荷量は2倍程度の規模になると見ている。蓄電システムの製品もアップデートをしていく計画で、セルの容量をより高めていく。

-ペロブスカイト太陽電池製品の販売はいつ頃の開始を想定していますか

銭晶 現在は後期のテストを行っている段階にあり、2027年から2028年にかけての時期に製品のテスト販売開始を想定している。その際は、既存の結晶シリコン太陽電池と組み合わせたタンデム型の太陽電池製品となるだろう。

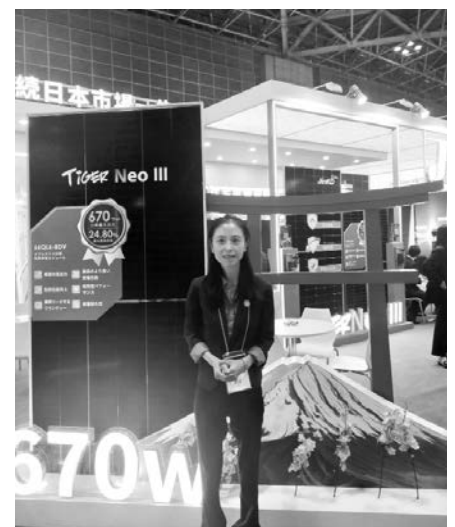
-中国市場の状況は。また今年4月から政府が太陽電池製品の輸出増徴税の還付措置を廃止しましたが、この影響をどう見えていますか。

銭晶 中国はすでに安定市場となり、年間の市場はおよそ250GW規模で推移している。

また中国では今年4月から、政府が太陽電池メーカーへの輸出増徴税の還付措置を廃止したが、この廃止は業界にとって良いことでもある。この廃止が過剰な生産へのコントロールとなり、またこの優遇措置で経営を維持してきた脆弱なメーカーは退場し、良好なメーカーだけが生き残ることになる。そのようなことから2026年の業界の状況は、2025年より若干改善するとも見込んでいる。

-アメリカではトランプ政権による関税政策などありますが、同国向け製品の出荷への影響は

銭晶 ジンコソーラーの技術力に対す



銭晶氏

る、米国の顧客からのももとの信頼関係があり、トランプ政権による様々な政策による影響がある中でも、米国向けにも年間5～6GW程度の太陽電池モジュールの出荷を行っている。

-中東ではイランで戦争も発生しました。こうした情勢の不安定化による事業への影響をどうとらえていますか

銭晶 短期的な視点では、物流の滞りという影響が発生し、顧客側も中東での太陽光発電所建設プロジェクトの延期にも見舞われている。また、産油国での戦争発生によるエネルギー状況の緊張は、物流や材料価格の高騰を引き起こすだけでなく、とくに欧州などで石油から新エネルギーへ、より転換を進めていくという思考に結び付くことも想定され、こうしたことが、太陽電池価格の上昇を引き起こす可能性も考えられる。